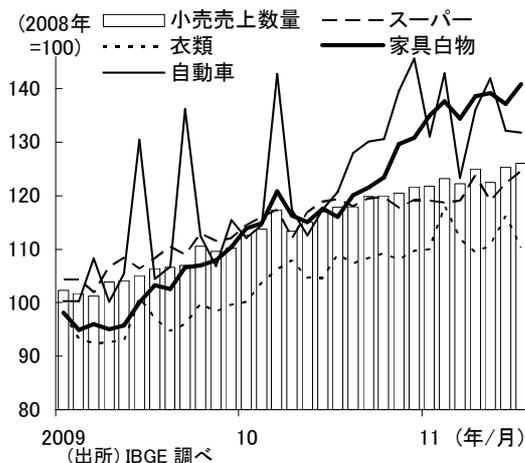


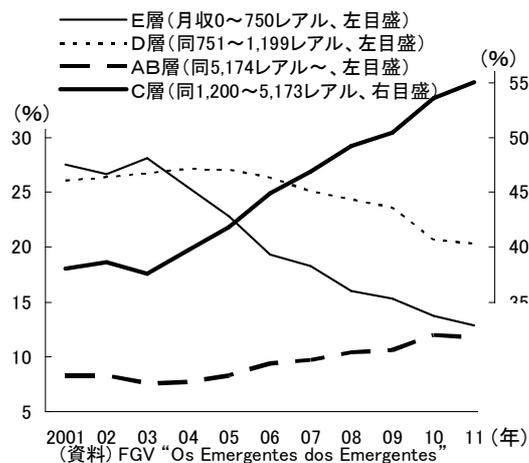
## 再加速するブラジル消費 ～ 原動力は中間層の増加と都市化 ～

- (1) ブラジルの経済成長は、本年に入り個人消費が第一の牽引役ながら、数量ベースで小売売上をみると、今春来、増勢に翳り(図表1)。インフレや金利上昇、先行き不透明感の増大を受けた動きとの見方が大勢。しかし月次動向を細かくみると6月以降再び増勢回復。直近7月は市場予測を上回る前年比7.1%増へ。主な品目別には家具や白物家電、あるいはスマホなど情報端末が際立って増加。所得・雇用環境の改善と積極的な消費者心理が主因。
- (2) 異なる切り口からみれば中間層の増加と都市化の進行。まず所得階層別の人口シェアをみると前ルーラ政権発足後、一貫して低所得層が減少する一方、中間層が増加(図表2)。高所得層も緩やかな増勢。中間層は2009年に5割を超え11年は55%へ。一方、低所得層では、とりわけ最貧困層のシェア減少が顕著。中間層の人口数は、10年に前年比7百万人弱増加し、11年は同4百万人弱の増加。急速な消費市場の拡大を後押し。
- (3) 次に都市化をみると、ブラジルが高度成長を謳歌した70年代前半期までに比べれば、都市圏人口の増勢はほぼ半減したものの引き続き今後も年平均1%ペースで増加(図表3)。雇用情勢を主要都市別にみると、19世紀から同国経済を牽引してきた南東部(サンパウロ、リオデジャネイロ)や南部(ポータアレグレ、ベオリゾンデ)では労働需給の逼迫が一段と深刻化するなか人口集中が進行(図表4)。それに対して従来、後進地域とされてきた北東部(サンバドール、レシフェ)では、余剰労働力の就業化が進むなか、都市化が進行。今日、都市化と中間層の増加はほぼブラジル全土に拡大。今後を展望しても、その成長メカニズムは次第にペースダウンするものの中期的に持続。底堅い成長軌道が続く公算大。

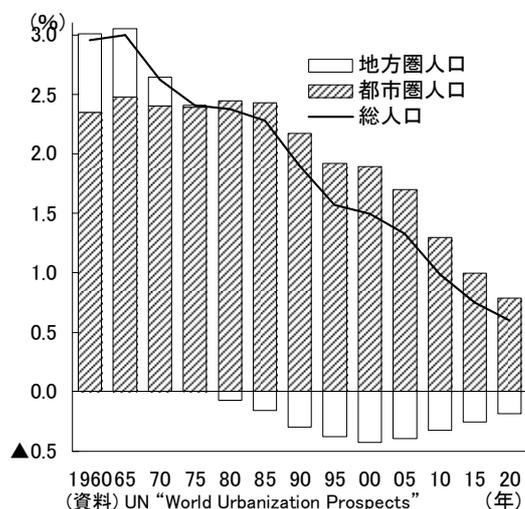
(図表1) ブラジルの小売売上数量(季調済)



(図表2) 所得階層別人口シェア



(図表3) 都市圏・地方圏別人口(年平均増加率)



(図表4) 主要都市別失業率と雇用者比率(季調済)

